
誰にでも意見を合わせる男

入川出水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰にでも意見を合わせる男

【Nコード】

N8080U

【作者名】

入川出水

【あらすじ】

あるところに、誰にでも意見を合わせる男がいた。

(前書き)

ショートショート第三弾。

あるところに、誰にでも意見を合わせる男がいた。名前を〇寺と
いった。

とある夏の日に、〇寺の友人K倉^{ケイ}はこんなことを呟いた。
「今日は暑いなあ。こんなに暑い日はめったにないよ」
すると〇寺はにこにこ笑みをはりつけながら、
「わかります、わかります。ばくも暑くてたまりません」
と、両手で顔を扇ぐのだった。

〇寺はK倉と別れてまもなく、もう一人の友人S井^{エス}と出会った。
S井はこんなことを語った。

「今日は涼しいなあ。今年は冷夏なのかもしれない」
それに対して、〇寺は満面の笑みを浮かべて、
「わかります、わかります。ばくも二の腕の辺りがひんやりとして
仕方がありません」

と、両手で肌をさするのだった。

また別の日に、K倉は〇寺にこんなことを打ち明けた。

「おれ、実はM子^{エム}のことが好きなんだ」

〇寺はいつもの笑顔でK倉の肩を叩いた。

「だいじょうぶですよ。K倉くんならきつとM子さんとうまくいき
ます。というよりも、K倉くんほどM子さんに似合う男は他にいま
せん」

と、自信たつぷりに励ますのだった。

翌日にS井から〇寺に電話が掛かってきた。S井はこんなことを
漏らした。

「おれ、実はM子のことが好きなんだ。でも、K倉もM子を狙っているみたいなんだ」

「心配はいりません。M子さんは、おそらくK倉くんよりもS井くんのことのほうが好きでしょう。S井くんなら、きっとM子さんとうまくいきます。ぼくが保証します」

と、背中を押すのだった。

ある日、O寺がK倉とS井と一緒に昼食を摂っていたところ、M子の話題になった。

K倉は少し照れながらこんなことを話した。

「おれはM子に告白しようと思う。O寺も、おれならM子とうまくやれると言ってくれた」

「ええ、そのとおりです。K倉くんは必ずM子さんとうまくいきます」

O寺は一切の迷いなく言い切った。

すると、S井が焦ってこんなことを聞いてきた。

「O寺、おまえはおれとM子の仲を保証してくれたんじゃないのか。彼女はK倉よりもおれのことのほうが好きだと、そう言ったじゃないか」

「ええ、言いました。S井くんは必ずM子さんとうまくいきます」

O寺はさも当たり前のように言い放った。

ここまできて、K倉とS井は首を傾げた。

「おまえは一体どっちの味方なんだ」

「さっきから言っていることが矛盾しているじゃないか」

しかしO寺はまったく臆することなく、こう答えた。

「ぼくはお二人とも味の方です。とても心強い味方です。はい、確かに矛盾しています。ぼくほど矛盾している人はそういないのではないか、というくらい矛盾しています」

O寺の言葉に、K倉とS井は顔を見合わせて、
「もつわけがわからない」

「まったくだ」

と、あきれ返ったのだった。

ちょうどそこに、M子がやってきた。M子はこんなことを告白した。

「わたし実はK倉くんのことが好きなの」

「本当か、M子」

K倉とM子は見つめ合って、顔を赤らめた。S井はひどく落ち込んだ。

「よかったですね、K倉くん。ぼくはいつかこうなると信じていました」

「ありがとうO寺。さっきは疑ってすまなかった」

しかしM子は首を振った。

「でもわたし、S井くんのことも嫌いじゃないの。いいえ、むしろ好きなのかもしれない」

「本当か、M子」

S井は顔を上げて、M子と見つめ合った。K倉はとても落胆した。「よかったですね、S井くん。ぼくはいつかこうなると信じていました」

そこでK倉とS井はまたも顔を見合わせ、そして憤慨した。

「O寺、おまえは本当にはつきりしないやつだな！」

「おまえみたいな他人に合わせてばかりの人間は、最低だ！」

「そうだ、最低だ！」

しかしO寺はやはりににこと笑みをはりつけながら、こんなことを言った。

「そのとおりです。ぼくは最低な人間です。最も低いと書いて、最低です」

K倉とS井は恐ろしい顔でO寺を睨み付けた。

「最低な人間はどうなるべきかわかるか」

「はい、よくわかります」

「最低な人間は死ぬべきだ」

「ええ、絶対に死ぬべきです。生かしてはなりません」

「じゃあ、おれたちがおまえを殺す」

「そのほうがいいでしょう」

K倉とS井は、O寺を殺した。

誰にでも意見を合わせる男は、死んだ。

（後書き）

感想待ってます（^^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8080u/>

誰にでも意見を合わせる男

2011年10月7日10時34分発行